

## 論文内容要旨

※整理番号	11	(ふりがな) 氏 名	かたおか みか 片岡 三佳
修士論文題目	精神分裂病者が語る入院体験 ―現象学的アプローチを用いて―		
目的	<p>精神分裂病者にとって、入院病棟は生存上最重要な環境となる。より安全で安心できる療養環境の提供、および基本的人権を尊重した個別的な看護ケアの提供など、精神科看護の質の向上を目指すために、精神分裂病者の生きられた入院体験を明らかにする。</p>		
方法	<p>Giorgi による現象学的アプローチを用いて、入院体験のある私立精神病院精神科外来に通院している精神分裂病者 8 名（男性 5 名、女性 3 名）に、半構成的インタビューを 1 名の参加者に対して 2 回実施した。</p>		
結果	<p>精神分裂病者の語られた入院体験には、【病気に関すること】【入院生活に関すること】【社会との関係に関すること】【他者との関係に関すること】【精神病との関わり】の 5 つのカテゴリーと 21 サブカテゴリーが抽出された。各カテゴリーは、単独に存在するのではなく、相互に関連して存在していた。また、1 人の参加者が、すべてのカテゴリーについて語っているのではなく、参加者によってウエイトをおくカテゴリーは異なっていた。</p>		
考察	<p>精神分裂病者の入院体験には、「孤独感」「苦悩」「自分らしさの喪失」「社会関係の欠如」「満たされない対人関係」「人間の創出力」「心のバランス」の意味があり、その根底には孤独感が存在していた。精神分裂病者の入院は、病と自分らしさの喪失による苦悩、社会的存在の危機状態を独りで背負う、孤独そのものの体験であった。そのなかで、人間の自然の力を創出し、自分の存在意義を確立しようとする心のバランス機能を働かせていた。この過程を通して、精神分裂病者が、真の意味での「精神分裂病」という病を自分がひき受ける覚悟を決めるために、入院は必要な場であり時間であった。これらのことから、入院中の精神分裂病者への看護で特に重要と思われたことは、以下の 4 点である。1) 孤独に対する看護の検討、2) その人にとっての病識の意味に焦点をあてた看護者の関わり、3) 規制された入院生活のなかで、その人らしく過ごせるための看護者の関わり、4) その人にとっての入院体験の意味をともに考える存在者としての看護者の関わり。</p>		
総括	<p>精神分裂病は人間存在に直結する深刻過ぎる病であり、精神分裂病の病を抱えた人達の深遠な入院体験に対しては、ごく一面にしか触れていないものと思われる。今後の課題として、他施設との比較、インタビュアーのスキルの向上、さらなる言葉の洗練などがある。また、精神分裂病自体の症状の変化、地域精神医療の推進などもみられ、看護もまた多様な形をとるものと思われる。今後とも、精神分裂病者にとっての病の意味、入院体験の意味を問いつづけ、精神科看護の質の向上を探究しつづけていく必要がある。</p>		

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字以内)  
2. ※印の欄には記入しないこと。